

会 報 第 11 号

「今井研卒研究生・有志の会」 2007.9.30

目 次

	頁
1. 巻 頭 文 今井 哲二 先生	2
2. 第 六 回 懇 親 会 (2007.07.28) から	
1) 今井 先生 による開会のご挨拶	3
2) 鈴木 威一 様 「交詢社」の歴史について	4
3) 平賀 貞太郎 様 ご挨拶	5
4) 岡本 紘 様 ご挨拶	7
5) 倉本 敏雄 様 ご挨拶と乾杯の音頭	8
3. 近 況 報 告	8
4. 「会報 第10号 記念号」にお寄せ戴いた感想文	9
5. 第 六 回 懇 親 会 決 定 事 項	12
6. 編 集 後 記	13
7. 集 合 写 真	14

1. 巻頭文

帰り道

今井哲二

「交詢社」での懇親会の帰り道、有楽町の方へブラブラと久しぶりに都心部を歩いた。方向が同じと言うことで岡本さん、坪井さん、島田さんが一緒であった。めったに来ることのない数寄屋橋の辺りでは、昔よく来たソニービル周辺の変貌振りに目を見張り、往時のあれこれが脳裏をよぎった。山手線の向こう側に威容を見せる“国際フォーラム”の雑然とした一階の片隅でコーヒーを飲みながら雑談を交わした。



坪井さんは七十歳を目前に「卒研究生の会」に情熱を注ぐ傍ら、エイジシューターを目指してゴルフにも励んでいる。岡本さんは勝れた研究者としての過去をバックに、知的アンテナを張り巡らし今現在に繋がる活動を模索している。島田さんは十八歳で旧電気試験所に入所以来諸々の研究推進の裏方として、今日のIT時代へと歩みを共にしてきた。私は、ということ、基本的には「太極拳」や宝生流「謡曲」に定期的に触れると共に、「卒研究生の会」や昔からの友人などのご厚意に接しながら、未だに何やかやと過ぎ越し歩みから脱しきれずにいる。

お茶を飲みながらの雑談は、我々一人一人が戦後の日本を担った庶民の典型的存在であること、の確認のようなものであった。

7月28日(土)も夕方に近い四時頃であったろうか? 参議院議員選挙を翌日に控えた最後の追い込みのときであった。東京駅で坪井さんは山手線に、残る我々は中央線に乗った。中央線のドアが閉まる直前に、数人の一団が忙しげに乗り込んできた。目の前に立ったのは何と社民党福島党首とそのスタッフであった。蒸し暑さの残る車内で、汗を拭き拭き。名古屋から羽田を経て国分寺での遊説、国分寺からは都心で最後の最後の遊説、という。岡本さんが席を譲ろうとしたが遠慮して立ったまま。中野駅で、岡本さんが下車のため席を立ち私の隣に福島党首が座った(そこでパチリ)。ドアから車外に降りようとする岡本さんの為に、福島さんは態々立ってサービス(そこでパチリ)。



“宗教と政治の話をするとうちを失う”とか。事実関係だけで言えば、あの翌日の参院選挙の結果は、我々庶民の民意を見事に反映するものであった。何分かの間、席を隣り合わせた誼で言えば、社民党の後退は残念であった。

小柄な身体のどこに、あの護憲・反戦のエネルギーが満ちているのだろうか。様々な考え方はあろうが、清廉で弱者擁護に徹する政治家は、いつの世にも絶対に欠くことは出来ない。そのように私には思えてならない。